

季節を詠む、  
時流を詠む

四季の歌



美野里短歌クラブ

緊張に顔強張らせ走りゆく小六の孫テープをきりて  
誰しもがいつかは逝くが早過ぎるフェースブックの知人の訃報  
医者通いひとおり終えやれやれと帰路に立ち寄るコンビニストア  
すこやかに心さわやかなる時は誰しも出せるほがらかな声  
台風が梅雨前線しげきして九州各地の被害は多し

小川短歌会

家族らに支えられつつ卒寿超え尚生きんとぞ体力養う  
住みついてもう八年目野良猫も赤ちゃん生んで日向ぼっこだ  
卓上のつゆくさ一輪昼は閉じ朝おのずから出づる藍いろ  
おばあちゃん暑くなるから気をつけてね電話の声に元気をもらう  
コロナあけ友とのランチファミレスは配膳ロボットはこびきたれり

玉里短歌会

地底より湧き出る清水しつとりと鹿島の杜を潤しており  
一升餅リュックに背負い一歳の孫はヨチヨチ歩き始めぬ  
幾つもの山川越え来し八十路坂超えてこのまま元気に生きむ  
朝日浴び競い咲きいる鬼百合をしばし眺める紫煙くゆらし  
一輪挿しに香りの良しと梔子を好みし母よ十三回忌

菱沼清子 菱沼友江 宇都宮和子 破谷きえ 白根沢清香 石田はる江 小川ヒロコ 幡谷啓子 根本智恵子 中根良子 正木敦子 高田久子 石橋吉生 鶴町文男 野口初江

みづうみ俳句会

親鹿の眼が光る北の夏  
昼下がりに蝉とうぐいす歌比べ  
遠雷が静かにするどく夕暮に  
桃取りぬ草刈鎌で引き寄せて  
ゆかた着て少女は一寸大人びぬ

みのり俳句会

平安の面影池に蓮の寺  
風もなく人蔭もなき炎天下  
風鈴の程よくひびく風生る  
ひまわりや背丈をこえて咲き乱る  
ふんはりと広ぐる合歓の花あかり

櫂の会

いっせいに鳴き出す蝉の日暮れかな  
鋭角に鬼百合活ける原爆忌  
八月来語らぬちの軍歌かな  
いかずちや手乗りインコの無精卵  
夏つばめ迷いをさらって行きにけり

くるみ俳句会

木下闇こわれかけたる丸太椅子  
原爆忌蝉の鳴き声涙声  
遠筑波見下ろし高き雲の峰  
秋暑し母の背中の小さきこと  
鬼ヤンマ風の如くに来て去れり

たまり俳句会

蘇鉄花の野馬に優しや都井岬  
大谷を着に独り冷やし酒  
八月や海鳴り届け対馬丸  
想い出に悲しみ新盆の家  
祇園会や風の中より京なまり

小美玉川柳会

甲子園日焼けの中に闘志こめ  
輪が歪む大風呂敷きを語るとき  
ひと仕事終えて昼寝は気兼ねなく  
振り返る我が人生の落とし物  
勝ち目なし一発食らい楽になる

長島美奈子 長島さか江 長島昭 榎本喜代子 長島久美子 佐藤清心 島田清香 白根澤清 立原千代 塚田文江 井坂あさ 矢口富久 網代奈津江 村田妙子 木村小夜子 安彦昭宣 大曾根工ミ 小原工 信田睦子 城垣睦子 松田通喜 鶴町文男 まめすけ 野口初江 れもん 枝川白水 原川富貴子 小林岳悠 小戸忠男 江井昭夫 石井昭夫